

## 第2課「選択の力」

\* 神は私たちに「自由意志」すなわち「選択の力」を与えて下さっている。それは、私たちが神の奴隷やロボットのようなものではなく、神との関係を築き、積極的な愛の絆を持つ事により、永遠に存在（健康で幸福に）する事ができる様にとの神のご計画であり恵みである。

### 1. 自由意志の明と暗

- **自由とは**：置かれた状況によって様々に解釈される故に、その意味を正確に把握する事は難しい。選択の能力が与えられているからこそ「自由」がある。神は人を御自身に似た者として道徳的な存在とされた。同時に人は道徳的な自由を持つ者である。それは、道徳的に生きることもできればそうでなく生きることもできるという事でもある。
- **アダムとエバの例（善悪を知る木の試み）**：神はアダムとエバに、たった一つだけ禁令を与えた。それは決して難しい事ではなかった。完全な心と身体を持つ彼らにとって、それはあまりにも容易な事だった（神は意地悪でも、試みる為にずるいことをしている訳ではない）。しかし、彼らは禁令を犯し、罪ある者となってしまった。善悪を知る木の実を食べるか否かという問題は、神に従うか否かを問う簡単な試験であった。人の内に備えられた「道徳」という能力をいかに用いるかが試みられた（創世2：16～17）。①エバの場合：まずエバがサタンの誘惑にあった。サタンは蛇を媒体として彼女を誘惑した。②アダムの場合：エバが失われる事を悲しみ、彼女と運命を共にしようとして神の言葉に背いた（創世3：1～6）。彼らの共通する過ちは、神を忘れ、神以外のものを優先する事、選択することによってサタンの罠に落ちたという事である。罪の世に生きる私たちは、エデンの彼らよりも深刻な状況に置かれている。私たちはもっと神に寄り頼まなければならないのではないだろうか。  
\* 「希望への光」27～30p、「人類のあけぼの」上巻39～45pを必読。
- **悪い選択の結果**：アダムとエバの例から見ると、まず罪の隠蔽（騙し、誤摩化す）、そして恥と不安が起こった。彼らは、神を前にして罪の責任を認めたのではなく、言い訳をし、責任のなすり付けを行なった。アダムはエバに、エバは蛇に、そして二人とも蛇を造り、エバを与えた神のせいにしようとした（創世3：7～13）。言い訳は、自分自身を騙す事である。自分の責任を認めない限り罪に勝利することはできない。また、神の介入はなされない（人がそれ求めない限り介入できない。これも自由意志の尊重故）。

### 2. ふたつにひとつ

- **正しい選択**：①アブラハムの例：神に対する信仰と服従の人生を送った。神の約束（ヘブライ11：10）に希望を抱き、神に全信的信頼を寄せた（ヘブライ11：8～10）。②ダニエルの例：偶像に供えられた王の食物を食べる事は、偶像を受入れることを意味していた。それ故に「自分を汚す」（ダニエル1：8）と表現されている。どんな状況においても、常に神を信じる事を、偶像に供えられていなかったと思われる野菜と水を求め、神に対する信仰と忠誠を表した（ダニエル1：8～16）。
- **間違った選択**：神に対する信仰と服従に生きたアブラハムであったが、彼も罪人であり決して完全無欠の人ではなかった。ハガルとの結婚（子孫を残す為の一夫多妻を正当化しようとする当時の習慣で、神のみ旨ではない）は、家庭内に不和と混乱を生じさせた（創世16章、21：9～14）。また、その影響は一時的な事にとどまらず末代まで影響を及ぼす結果となった（ハガルの子イシュマエルは、イスラム教においてはアラブ人の祖先とされ、マホメットはイシュマエルの直系の子孫である事を自認しイスラム教の基礎を築いた。イサクよりもイシュマエルが重視されている。）。
- **確信をもって正しい選択をする事の重要性**：私たちが、確信をもって正しい選択をする為には、心にしっかりとした基準が必要となる。それは「神の戒め」（善悪の基準を明確に自覚する。詩篇119：11）と、私の価値観やこの世の価値観ではなく神の価値観を知る事（フィリピ4：8、コロサイ3：2）である。
- **次世代への影響**：良しにつけ悪しきにつけ私たちの選択は、次世代に大きな影響を与える。人は環境を通して学ぶ。それが悪習慣であるなら道徳感とは低下あるいは欠如してしまう。身体については不健康が伴う。神の戒めは難しくすぎることはない（むしろ常識的な事）。難しくするのはまさに私たち自身かもしれない。神のみ言葉を常に自分の傍らに置き（申命30：14）、神を愛し、神のみ旨に従って歩み、戒めを守る。それに対する神の約束は①命を得る（健康的な生活と将来の救いと永遠の命に繋がる）。②祝福を受ける。神を離れ、偶像に従うものは滅び（将来がない）、短命（病や不健康）となる（申命30：10～19）。

### 3. それぞれの立場に対し導き助けられる神

自分のおかれた立場や状況や環境は、必ずしも自分の犯す罪のいい訳にはならない。確かに劣悪な環境の中に生きてきた場合、過酷な生活を送っている場合、自分の身体に様々な困難（重い病や障害など）を持っている場合があるかもしれない。しかし、神は万事を益とする事を覚えておきたい。キリスト者は積極的な人生を生きるのである。むしろ困難を克服することによって心も身体も強くなると理解し確信する。私たちは「神の都で生まれ」た者として、罪という劣悪な環境の中に生まれ、悪の傾向を持ちつつも、イエスの贖いを受入れ、悔い改めと献身によって、信仰のうちに、聖霊の導きを受け「新生」を経験するのである（詩篇87：5～6）。葡萄の木としてのイエスに接ぎ木された枝として歩み続けてゆきたい。